

金光教の声

(平成22年1月～3月放送分)

【おへつ】

いのちが喜ぶ	3	自分の都合、神様の都合	31
一旦こまれ	7	姑のひと言	35
光はいつも頭の上に	11	母の祈り、娘の祈り	39
いのちの鼓動	15	神様との出会い	43
おほかのはなし	19	薄紙を貼るように	47
私が筋肉痛になったワケ	23	きっと神様は私のために	51
サンキューを忘れずに	27		

佐藤光俊

私のある友人が、地方公共団体の課長職を任せられていました。その彼が、ある時、次のように心の内を語ってくれたことがありました。

皆様、新年明けましておめでとうございます。

さて、皆様には、この新年をどのような思いでお迎えになりましたでしょうか。昨年のことを思い返して、ご家族のこと、職場や学校でのこと、身近な人間関係でのこと、ここから将来にかけての問題や課題など、今年こそは、と願いを新たにされたことかと存じます。

また、かつてない経済不況とも相まって、出口の見えない生活不安や、雇用不安、人間関係の破綻（はたん）などに苦しみ、困難を抱えつつ、新年を迎えた方々も少なくはないでしょう。

「自分は、国立大学を出て、地方公務員として就職し、今日まで何一つ失敗もなく勤めてきた。しかし、定年間近になって思うのは、あと2、3年もしたら退職金を受け取って辞めるだけだが、その金額ももう分かっている。あとは、定年まで用心して、大きな失敗さえしなければ、無事にその日を迎えるだろう。あと、2、3年分の給与と退職金、この金額を受け取る時に、自分の生涯の値打ちが決まってしまう。そう思うと、自分の生涯がこのお金に換算されるものに見えて来て、どうも気分が晴れず、憂うつになってしまうんだ。毎日職場に行くのが、億

劫（おつくう）で、夕方になると友人から食事に誘われるが、お酒を飲んでも気は晴れないし、この頃は、夜もあまり眠れない」と、私につぶやくように打ち明けたのです。

一般的には、何とせいたくな悩みか、と言われるかもしれませんが。しかし、私には、それはそれで深刻な悩みだなあ、と思ったのです。現代人に特有の悩みかもしれません。

その後、しばらくして、彼が定年を待たずに退職したと聞いて、私はあとわずかな年月を、不満はありながらも、定年まで勤めるものとはかり思っていましたので、大変驚きました。何がそうさせたのだろうか、と。

その後私は、彼が、毎日のように、作業服を着て、

くわを担いで、田畑に出かけ、昼前に帰って来ては、また午後から出かけていくのを、見かけるようになりました。聞いてみますと、祖父の代まで続けてきた農業を、素人ながら心向くままに、始めた、と照れながらも、楽しそうに話したのです。

今年から、わずかながらに稲作を始め、畑にも季節の野菜や花、果物を植えている、と言います。折々には、友人が来ては、熱心に農業の基本を教えてくれて、手伝ってもらえるらしい。その話が毎回、大変面白くて、今まで考えもしなかったことが、たくさんあることに気付き、夜寝る時も朝が来るのが楽しみで、大変充実している、とも言います。そして秋には皆を呼んで、採れた物を一緒に食べたいから、私にも来て欲しい、と笑顔で話してくれました。以

来、収穫があると、ご近所の方や友人に、配っているそうです。

私は、この話を聞いて、生命（いのち）がよみがえったのだなあ、と感動しました。

この友人は、一流大学を出て、自分にとってふさわしい就職として地方公務員の道を選びました。安定した職場であり、社会への貢献も出来、自宅からほぼ近くの職場に通勤し、両親と同居して、地域との交流や親せき付き合いもすることが出来る。20代後半に結婚し、二男一女の子どもにも恵まれ、とりわけの資産家という訳ではないが、田畑も家も持ち、大変恵まれた境遇にあるのです。職場では、順調に職務をこなし、実績に応じて次第に立場も与えられ、定時に出勤し、定時に帰宅。大病の経験もなく、家

族も皆健康である。いわば、何不自由のない暮らしぶりであるのに、心が晴れず、夜もよく眠ることが出来ないといっていた彼が、定年前に辞職しなければならなかったのはなぜなのでしょう。

彼は将来、結婚し、子育てのことなど、生きる便（よすが）にと、人生の選択の中で、公務員の道を選択先として選んだのであって、決して、生き方を選んだ訳ではなかったのです。まじめに、日々黙々と勤め、多くのものは手にしたのですが、人生の残り時間を考えるようになって、そこから新たな悩みがわき起こったのでありましょう。40年勤めてきて、初めて気づいた事実というべきかもしれません。私どもは、どこか自分の力で生きていると思いついていますが、得ることだけを考えて生きていると、

いつしか満たされないものを体内に蓄積して、「夜も眠れない」思いになるのかもしれない。「得る」ことを中心に生活していると、「得られなくなる」ことは憂うつであり、不安感にさいなまれることになるようです。

しかし、「得られる」ことに感謝し、自分もまた、その喜びを「分かち与える」生活をするので、人間は生きられるのだと教えられているように思うのです。

金光教の教祖、金光大神様は、「人間は、万物の霊長じゃというが、その霊長は何から出来たか、知っておられるかな。それは母の体内で作られたに相違ないといっても、人間の分別で作ったものではない。食物はお百姓さんが作ったというても、お百姓

さんの力でも肥料の力でもなく、天地の御恵みの外から、生まれて来るところはないのでありますのう。そうすると、人間は万物の霊長というても、またその上に、天地がござっしやることを忘れてはなりませんのう。子どもが恩を知らぬというて嘆く親があるが、天地の神の御恩を忘れておつては、みだりには言えませぬことでありますのう」と教えられます。

私たちは、天地の恵みの中で生きているという、最も根本的で厳粛な事実、このことを決して忘れてはなりません。このことに感謝し、その喜びを分かち合いながら、そこに基づく生き方を進めていくたものです。

大林 誠

お早うございます。大林と申します。

私には高校生の息子がいるんですけども、ちょっとこの子が変わり者でして、着るものでも、何か変なのが好きなんですね。今年の夏、好んで着ておりましたのが、白いTシャツだったんですけどね、交通標識みたいなのが図柄になってるんです。交差点でよく見かけますよね、赤い逆三角形で「止まれ」と書いたの。あれが胸の所に大きく描かれてる。でもよく見るとそれが、「止まれ」じゃなくてですね、「こまれ」って書いてあるんですよ。なかなか面白いでしょ。

まあ本人は、ただ軽いノリでこの意地悪な標識を楽しんでるんでしょうけれども、見ているこちら側は、気になって仕方がない。そのうちに、この「こまれ」という図柄が、何か深い意味を持ったメッセージみたいに思えてきたんです。

実はこのところ、困ったなあ、と思うようなことがちよくちよく起こりまして、そのうちの一つにですね、母が70代後半になって、急に耳が遠くなってきた、ということがあります。話がなかなかうまくかみ合わないんですね。

例えばこんなことがありました。

妻の友人が、何かサークルの行事の相談があるとかで来られた時のことですが、漁港の近くに住んでいる人なので、その時手土産に、エビを2、30匹持

って来られたんです。

で、その方と妻とが、楽し気にペチャクチャ話している、その隣の部屋で、私がコーヒーの準備をしておりますと、母がそのエビを持ってやってきました。

「誠、（私、マコトって言います）誠、エビをもらったでな、今晚、焼き豆腐といっしょに千枝子さん

に炊いてもらおうと思つとつたけどな、今見たら、頭が取つてあるわ。頭がなかったら、ええダシがこれへんな。おいしゅうないな。どないしよう」

ヒヤツとしましたねー。いや、本人は何も悪気はないんですよ。どんなメニューにしようかというだけのことですからね。でも「ダシが出ない」とか「おいしくない」なんて言ってるのが聞こえたら、いい

気がしないじゃないですか。

まあ幸い、隣の部屋ではそんなのまったく気付かないほど話が弾んでいるらしくて、大丈夫だったんですけどね。

私は、とにかく母に静かにしてもらわなければいけない、ということまで頭がいっぱいになってしまいました。

「シート、隣に聞こえるよ」。こう申しますと、「あのな、エビをもらったんやけどな、頭が取つてあるで、ダシが出れへんで、豆腐と炊いてもおいしくないで、どないしよう言うてるやがな」。

母のヒソヒソ声は普通の声より大きいんですよ。「ヒソヒソ声はやめて。悪口言ってるみたいに聞こえるよ」

「何にも悪いこと言うとれへんがな。何がいけない。もう、あんたは、子どもの頃は素直なええ子やったのに」

私もう50なんですけどね。まあとにかく、静かにしてもらおうと思えば思うほど、どんどんまずいことになっていくんです。

「分かった分かった。頼むから、もうとにかく、その話は後にして」

ちようどこの時に、隣の話がたまたま途切れまして、シーンと静かになった。そこに母の大きな声。

「なんで誠は私の話を聞いてくれんの。あんたほんとに、意地悪やわ」

妻の証言によりますと、隣の部屋に届いたせりふは、結局それだけだったみたいです。

「あんたほんとに、意地悪やわ」――。

今から思えば、これが神様の判定だった。ほんと、私がいけなかったんです。最初から何も余計なことは考えずに、母の思いを大事に受け止めてですね、「ああ、そうだねえ」と言ったらよかった。

「じゃあ何かおいしい料理を考えてもらうから、今晚楽しみにしてね」とでも言つて、エビを受け取つてしまえば、安心してもらえたんじゃないでしょうか。

お客さんに配慮をする、というところまでは良かったのかもしれませんが、それによつて親を責める気持ちになつていた。そこが結局、神様のお心に添わなかったんじゃないかなあと、後になって気付くんですね。

でもまあ、そういう失敗の繰り返しの中で、人間は少しずつでも成長させてもらえるのかもしれない。

先日、こんなこともありました。おやつを食べている時に、母が言うんです。

「誠、このせんべい、固うて私かめれへんわ。あんた食べてえな。食べかけやけどな、かんだのと違うで。手で割って食べとるんやから、きれいやで」

そう言っただけです。

「あ、そう。ありがとう。じゃあもらおうか」と受け取って口に入れたら、そのせんべい、何かヌルツとぬれた感じがするんですよ。

「あれ、このせんべい、ぬれてる」。私が疑いの眼差しを向けますと、「手が濡れとっただけやがな。

噛んだのと違うで。きたないことないで」。

ところが、その母の手を見ますと、そこには入れ歯が握られていたんですね。手がぬれていた理由はそれだったわけです。

本人は何の矛盾も感じていないようで、至ってまじめに答えています。私はもうちよつとで余計な反論をしてみたいそうになりましたが、その言葉を、思い切っただけせんべいと一緒に飲み込みました。

そして、「おいしいやろ」と言っている母に、もう一度「ありがとう」と言い、そう言えたことを胸の中で神様にもお礼を言いました。

交差点で一旦止まって左右を見る。それと同じように、折々に、一旦困って自分自身を見つめ直してみること、人間にとって大事なことなんだ

ろうな、と息子のTシャツを見ながら、しみじみ思

うようなことです。

それにしても、困ることだらけで、人生は味わい

深いですねえ。

光はいつも頭の上に

森山 恵美子

突然、思いがけない災難や病気に見舞われたら、あなたは一体どうしますか？ きつと取り乱したり、不安で動けなくなったりするかもしれません。

私もそうです。顔かたちや生まれ育ちが少々違っても、一皮むけば、皆、生身の体と心を頂いて、今日を必死で生きています。出来れば何事もなく、平穩に過ごしたいと願うのですが、現実はとても不確かで、絶対という約束のない世界を、一生懸命泳いでいるのがお互いなのではないでしょうか。

これは、3年前、私の身の上に起こった出来事です。ある日突然のことに、心は乱れ、落ち込みまし

た。でも、もがいているうちに、そこから大きなものと出合いました。そんなお話を聞いて下さい。

私は、島根県にある金光教の教会に奉仕しています。3年前の平成19年。教会が開かれて80年という記念の年を迎えました。信奉者の方々と、お祭をどうお仕えしようか、講演会は、記念冊子は、という相談し、時間をかけて、ようやく形になってきた頃のことでした。

いよいよ1週間後に迫った日のこと。母が、突然、倒れたのです。教会長である父を支え、家族を支え、縁の下の力持ちとして心を砕いて長年頑張ってきた母が、背中に激痛が走り、突然、倒れたのです。すぐに救急病院へ運び、検査の結果、急性大動脈解離ということが分かり、即入院となりました。

大動脈というのは、体の中心を走る一番太い血管で、心臓から内臓の各器官へ血液を運ぶ働きをしています。普通の大人でその太さは直径30ミリほどであり、血管壁は3重の層になっているそうです。母の場合は、血管の内膜が破れて血液が流れ込み、薄い膜で持ちこたえている。これがさらに膨らむと命に危険があるので即手術になるとのこと。手術の成功率は良くて5割、無事生還しても何らかの障害が残る場合もあるという、厳しい宣告でした。

「3日間は何が起きるか分かりません。今は流れ込んだ血液が、自然に固まりだし、解離は止まっています。血圧を下げ、負担を軽くしながら、このままふさがってくれるのを祈って待つしかありません」。お医者さんはそう言いました。あちこちに管

を付けられ、モニターに繋がれた母をICUにお預けして、父と私は、深夜、自宅へ戻りました。

「とにかく、ここからおかげを頂くしかない」。

そう話し、静まり返った神前に向かって、長い時間2人で祈りました。正直、何をどう願っていいのかわからない気持ちでした。目の前に起きていることに、頭と体がついていってない。そんな感じすらしたのです。

翌朝、私は起きてすぐに、境内にある奥城（おくつき）の前に座りました。それは亡くなった方の御霊（みたま）を祀（まつ）る石のお社で、足下には半畳ほどの広さの石が敷いてあります。私は、気持ち而定まらない時、ここにじっと座り、気持ちが落ち着くのを待つことにしています。この日も同じよ

うに冷たい石の上に座り、静かに目を閉じました。11月の寒い寒い早朝のことです。

「神様、おじいちゃんおばあちゃん、母が今、大変なことになっています。どうか助けて下さい」。

口に出してはみたものの、落ち着かなくて、その先、何も思えません。でも、このまま立ち上がるわけにもいかない。5分経ち、10分経ち…、しばらくすると石の冷たさが気にならなくなり、自分の中の迷いや不安がスーツと体の中から下に降りていくような感じがしました。すると、ふっと、頭の上を風が渡っていくのを感じました。木々のさわさわと揺れる音が聞こえ始め、しだいに明けてくる空の色や、遠くを走る電車の音や近所の物音などが急にざわざわと聞こえ、周りの様子をどんどん肌で感じるように

なつてきました。

すると、こんなことを思ったのです。ああ、私がどんな状態であっても、私の足下には大地がしっかりと支えてくれている。私がどんな状態であっても、頭上には風が吹きわたり、空が広がっている。

母はお医者様に「3日が山」と言われたけれども、今、この瞬間にも生きていないか。今日、明日の命がどうなるか分からないのは、誰であっても同じこと。でも、今この瞬間、生きとし生けるものすべてが、同じように限らない働きに支えられて命を繋いで頂いている。このことも動かしようのない事実だ。そう思えると、自然と腹は据わってきました。よし！ 私はこの働きを信じて、ここに命を託して、私は私の出来ることをしよう。精いっぱい、

今、出来ることをさせて頂こう。

それからの1週間は、病院の往復と、記念祭の準備とで目の回るような忙しきでしたが、不思議と心は一度も凹みませんでした。そして、母は、一日と力を頂き、何もしないという、最善で最高の治療を頂いて、だんだんと回復させて頂きました。

1週間目、記念祭当日。朝からの雨と風も、すべての行事が終わる頃には、すっかり止み、気が付くと、低い雲の切れ間から光が射し、大きな大きな虹が出ていました。それも、くつきりとした虹の上に、同じように大きく弧を描いてもう1本。11月の暗い空に、スーッと伸びる大きな大きな二重の虹。まるで、神様が「よく頑張ったね」と祝福してくれているようでした。

生きていれば、予測もつかないようなことが誰の

身にも起きてきます。人にぶつかって転んだり、心が傷ついて動けなくなることも。でもそんな時でも、あなたの一番下は揺るぎない地面が支えていてくれ、頭の上は限らない働きのじつと包み込んでくれています。今は少し見失っていたとしても、その働きを信じて、今日は今日の、私は私の出来ることを精いっぱいさせて頂くようではありませんか。

さあ、新しい一日の始まりです。

いのちの鼓動

藤本 有輝

私は今42歳ですが、2年前、背中や胸をグツと押さえつけられるような痛みを感じるようになりました。

それは、仕事が終わった時やお風呂につかっている時、また夜休む前といった、決まってほっとした瞬間に起こってきました。最初のうちは、筋肉痛と違ってあまり気にしないでいましたが、その症状が時々起こってくるので、もしかしたら病気かもしれないと心配になりました。

このことを妻に話すと、妻もやはり心配し、近くの病院で診てもらいました。検査結果は「狭心症の

疑いはありますが、ここでははつきり分かりません」
とのことです。そこで隣町の大きな病院で診てもら
うことになりました。有り難いことに、そこには心
臓病の権威といわれる先生がおられたのです。

病院へ行く前の日、いつもお参りしている金光教
の教会へ行き、先生に事の次第を話しました。教会
の先生は「それは心配ですね。しかし、まずは神様
にこれまで40年間、あなたが命を頂いてきたことを
お礼申しましょう。その上で、病院で検査が間違い
なく出来て、病気がどうかはつきりするように神様
にお願ひしましょうね」と言われました。

翌日、朝早く病院へ行き、循環器系の受付フロア
に向かうと、そこは人であふれかえっていました。
よく見ると、大きな荷物を抱えている人が多いので

す。話を聞いてみると、前の日から来てホテルに泊
まっていた人がほとんどでした。電車を乗り継いで
来た人や飛行機に乗ってきた人もいました。この病
院の先生の評判を聞いて、日本各地から来ていたの
です。長い間待たされてうんざりする気持ちがどこ
かへ吹き飛びました。

午前中によくやく一つの検査を受け、午後にもい
くつかの検査を受けて、先生の問診を受けられたの
は午後5時でした。先生は、私の話を聞いて「2日
後にもう一つ大きな検査をし、来週に結果を話す」
と言われました。私は言われるままに2日後検査を
受け、翌週、また待たされる覚悟を決めて病院へ行
きました。すると、その日は一番に呼ばれました。

先生は開口一番、「やはり狭心症ですね」と言わ

れました。続けて「でも、あなたの場合は少し違うんです。普通、狭心症というのは、心臓の周りにある冠状動脈がコレステロールなどにより動脈硬化が進み、血液が流れにくくなって起きます。しかし、あなたの冠状動脈には動脈硬化が見受けられないので、冠状動脈自体がけいれんを起こして血液が流れにくくなる異型狭心症です。異型とは異なる型と書きます」と紙に書いて説明してくれました。

「先生、これからどうすればいいのですか」と尋ねますと、「発作の時はニトログリセリン錠という薬を使って下さい。ただそれだけです。恐らく治ることはないのです、これからずっとこの病気と付き合ってくださいね。あなたの病気は安静時に起きるから、大いに働いて結構ですよ」と先生は言われました。

「何か気を付けることはありませんか」と私が押してお聞きしますと、先生は「疲れやストレスをためないことです。あと、薬は常に持ち歩いて下さいね」と言われました。私は「ありがとうございます」とお礼を言い、病院を後にしました。

その時の私は複雑な気持ちでした。病気が分かってホッとしたものの、これから一生この異型狭心症という病気を抱えて生きていかねばならないこと、その発作がいつ起こるか分からない中での生活を考えると、目の前が真っ暗になってきました。

病院の帰りに教会へ行きました。教会の先生に病気のことを話すと、「病気のことがはっきり分かって良かったです。それにしても、あなたはまだ若いのに大変ですね」と言われました。

私は「先生、そうなんです。これから先、一体どうすればいいのでしょうか」とお聞きしますと、先生は「あなたはこれまで心臓にお礼を言ったことがありませんか」と、反対に聞き返されました。私は「ありません」と答えました。すると先生は大きな声で、

「病気の虜（とりこ）になつてはいけません。あなたは病気があつても働けるではないですか。まずそのことを喜ばないと。あなたの心臓は一日も休みなく働き続けているのですよ。その心臓にお礼を申しましょうね」と言われました。

考えてみると、確かに今まで生きてきたということとは、心臓がずっと休むことなく動き続けてきたということなのです。さらに先生は「私たちは、神様から命を頂いて生かされて生きています。今日生き

ているから明日の命もあるなんて、誰にも分かりませんよ。神様に命のお礼を申して、一日一日を大切に過ごしていきましょう」と、私に勇気を与えるように優しく話してくれました。

その後、病氣のことを忘れてしまうほど、普段は元気に働くことが出来ました。しかし、ふと思いついたかのようなタイミングで、発作が起こります。そういう時はやはり心配になります。薬を頂きながら教会の先生のお言葉を思い出し、苦しい胸に手を当てて心臓にお礼を申します。するとなぜか、苦しいのに安心感に包まれていくのです。それは、たぶん神様が必死に私を生かそうとすることが、心臓の鼓動を通して感じられたからだと思います。

あれから2年の月日が流れました。今、私は毎朝

目覚めると、胸に手を当てて、心臓の「ドク、ドク」という鼓動を感じつつ、神様に命のお礼を申すことにしています。心臓の鼓動を通して、神様が私を生かそうとして下さるのが本当に有り難く感じられました。

これからも、神様が私を生かして下さいる限り、命を頂いている喜びをかみしめて、大切に生きていきたいと思えます。

大正9年生まれ、金光教の教会に奉仕していた私の父は、お墓好きでした。雨の日も風の日も父は毎日、教会にご縁のあった方がたくさん祀（まつ）られているお墓にお参りし、お水を替え、お掃除をし、それぞれの御霊（みたま）様にお祈りをして帰ってくるからです。

そんな姿を、もうお父さんはお墓が好きなんやからと、昭和28年生まれの長女である私は、いつもあきれおりました。お墓にどれだけの意味があるの、人間生きてる間がすべてじゃないの、お墓なんて形だけじゃないの、と若い頃はよくそう言って反発し

ておりました。

しかし、実は父も自分たちのお墓をどうするのか、どう考えてゆくのかということについては、

面と向かって話し合ったことがなかったのです。いつまでも家族は健康で変わらず暮らしてゆける、そう高をくくっていたのかもしれませんが。

平成16年、父が亡くなりました。そこで初めて、お墓をどうしようかということが家族の問題になりました。

あんなにお墓参りをしたにもかかわらず、父は親のお墓を知りません。幼い時に両親と別れ、戦争という大きな社会の変化もあって、親のお墓がいったいどこか分からなかったのです。懸命に探しもしたようですが、結局見つからなかったのです。ひょっ

とすれば、父は親のお墓が見つからないからこそ、人のお墓に足しげくお参りしていたのかもしれませんが。

自分に接し育ててくれる人を、親と慕って大きくなってきた父の気持ちを思うと、切なくなりました。そんな気持ちやもつともつと父とかわりたかったという思いからでしょうか。ふと神様をお願いして、我が家のお墓を作らせてもらおうという気持ちになりました。のちのち家族みんなが、一つお墓に入ってくんかするのでもいいかもなあ、などと思うようになったのです。お墓なんてと云っていた私だったのに、年月が心をとかしたのでしょうか。しかし、自分がそんな気持ちになれたのが、何だかほっこりとうれしい。それが、我ながら何とも不思議でした。

さて、お墓を造るぞ！ と大見得を切った私ですが、…困りました。父はどこに祀って欲しいという自分の願いは、何ひとつ家族に話していません。あつという間に1年がたち、2年目の夏、今日こそはお墓の場所だけでも決めさせてもらおうと、私、母、妹うち揃い、早朝に家を出ました。

家族で決めた条件は、よく日が差す明るい所がいということ、少々遠くても交通の便がよく、行きやすい所にしたということ、足の悪い母がお参りしやすいように階段のない所、ということ。この3つを胸に、まずは郊外の墓地を目指しました。

1時間かかってやつと着いてみると、まあ、素敵！ 広い芝生、周りを山に囲まれて、小さなせせらぎまであり、子どもたちが遊んでいます。鳥の声も聞こ

えて、お墓参りというよりはまるで遠足。ピクニック気分でもうここに決定、という時、妹がふと、「冬はどうなるんですか」と墓地の人に尋ねました。

「冬はね、吹きつさらしです」

大変。見回せば山の中の野つ原、風を遮る物は何もありません。夏こそ涼しいですが、父の命日のある2月には、誰もお参り出来ないということになるやもしれません。いい所なのになあ…。意気消沈して、私たちはこの場を去りました。

その後もお墓をいくつか回りましたが、どこも階段があつたり、不便だつたり、まさしく帯に短し褌（たすき）に長し。

そんなことをしているうちに、もう夕暮れです。へトへトの私たちは「もう一度、あそこに行こうか」

と言いました。あそこは、なずな霊園。父に

ご縁のある方がたくさん祀られていて、父が毎日毎日お参りした所です。家からもとても近い。なんだ、そこがあるのなら、最初からそこにすればいいじゃないかと言われそうですが、実はその前の年、いの一歩に行つたのです。ところが同じ霊園でも、新しく造成された場所はうっそうとしてあまりにも暗く、残念ながらやめたのです。

しかし、この際です。もう一度行ってみることにしました。おもしろいことに、ここは大学の構内にあります。その構内にある小さな門を開けると、そこが墓地。入った途端、「うわあ、日当たりがいい」「去年と同じ所なのに、いったいどうして?」。そう聞くと係の人が、「ここにあった大きな木を切つ

たのですよ」と言ってくれました。

見違えました。これならいい、近いし、明るいし、階段もない。おまけに若い人たちの声がしてにぎやかだ。決めようか、そう思つて後ろを向くと母も妹もニコニコとうなずいていました。

このような次第で、我が家のお墓は歩いて10分、バス停そば、階段無し、日当り良好の土地に出来、父はそこに一番乗りで入ることになりました。きつとお父さんもここがいいと思つていたんやなあ、日がたつにつれて、それは確信になりました。

いろいろ回つて近い所に落ち着いた、何だかネズミの嫁入りみたいだとおかしくなりました。それも父が毎日足を運んだ所です。

お父さんはきつと私たちにお墓造りを託したんだ

なあ、ふと思いました。父は自分のではなく、我が

家のお墓を造りたい。そう考えて、きっと私たちに
お墓造りを託したのでしょうか。しかし、私たちに自
分の願いを言うより、神様にお願ひしよう。そう思
って、毎日毎日この地に足を運んだのでしょうか。

雨の日も風の日も歩んだ父の足跡は、もちろん消
えています。しかし、父が足を運べば運ぶほど、父
の足跡はしつかりとした一本の道になり、強い願ひ
となり、神様に届いていたのでしょうか。その父の思
いを神様がくんで下さった。じつくりと柿の実が落
ちるように私たちの心が熟すのを待って、我が家の
お墓造りを実現して下さいたのだなあ、と思わずに
はおれないのであります。

私が筋肉痛になったワケ

中村宏子

今年の夏、私は「日ごろからどれほどの人にお世
話になって生きているんだろうか」と思わされる出
来事がありました。今日は、その時のことを聴いて
頂きたいと思います。

岡山県にある金光教の本部では、毎年夏に少年少
女全国大会という、子どもたちのためのお祭りが行
われます。その時のイベントの一つに、街中をたく
さんの音楽隊が練り歩くパレードがあり、私たち家
族もそれに参加するため、近くの教会の方々と一緒
に1年間楽器の練習を積み重ねてきました。主人は
大太鼓、私はフルートを担当し、2歳の息子と1歳

になったばかりの娘はマラカスを振って、家族で参加出来ることをとても楽しみにしていました。

本部へは、パレードの前日から他のメンバーと一緒に車で出かけました。初日は子どもたちも機嫌良く過ごし、順調なスタートに見えました。

ところが、夜になって息子が突然ぐずりだしたのです。

「お母ちゃん、ここ嫌だ。お母ちゃんの車に乗っておうちに帰りたい」

それからは、何を言ってもただ泣き叫ぶばかりです。私は仕方なく「お母ちゃんの車を探しに行こう」と外へ連れ出し、息子が納得するまで、真つ暗な道を抱っこして、ひたすら歩き続けたのでした。

その疲れも癒えないままで迎えた朝は、なんと土

砂降りの雨でした。過去、パレードで雨が降ったことはほとんどなく、私たち家族はその考えの甘さから、息子の雨合羽は持ってきたものの、大人用の雨具を全く持ってきていませんでした。宿舎からパレードの出発地点まで、楽器を持って歩いて行かなければなりません。あたふたしていると、周りの方々が気付いて、傘や合羽を貸して下さいました。

主人は大太鼓の運搬で手いっぱいです。私は娘をおんぶした上から合羽を着せてもらい、またグズグズ言い出した息子を抱っこし、傘を差して、どうにか出発地点にたどり着きました。

しかし、そこからがまた大変でした。娘は、遅れて駆けつけた母に預けることが出来ましたが、すっかり機嫌が悪くなった息子は「お母ちゃん、抱っこ、

抱っこ」としがみついてきます。私たちの出番が来ても、息子は歩こうとしませんでした。

「今、無理に下ろして泣かせたら、パレードが嫌な思い出になってしまう。それよりは、気が済むまで抱っこしてあげよう」

そう決意した私は、フルートを吹けない分、大声でメロディーを口ずさみながら、息子を抱いて行進しました。すると、誰かがサツと息子に麦わら帽子をかぶせてくれました。雨が当たって目を開けられない息子に気づいて、自分の帽子をかぶせて下さったのです。そのおかげで、息子は周りが見えるようになり、音楽に合わせてマラカスを振ることも出来るようになりました。

沿道には、雨にもかかわらず大勢の方が応援に駆

けつけて下さっていました。その声に励まされたのでしょうか、パレードも終盤にさしかかったころ、息子が突然こう言ったのです。

「僕下りる。マラカスする」

驚く私をよそに息子は颯爽と歩き出し、最後までしっかりと行進することが出来ました。

「お母ちゃん、僕頑張ったよ」と誇らしげに言う息子を抱きしめながら、私の顔は雨とうれし涙でぐちゃぐちゃになっていました。

「本当にありがたいパレードだったね」とみんな喜び合いながら片づけをし、最後にお礼のお参りをしました。私は神様に、このパレードで親子共に成長させて頂いたことをお礼申し上げました。

さあ、後は車に乗り込んで帰るだけです。ところ

が、今度は息子が「帰りたくない。まだ遊ぶんだ」と言い出しました。

泣きながら必死に抵抗する息子を引きずって行く様子は、はた目には人さらいに見えたかもしれませ

ん。
息子は、車に乗ってからも大声で泣き続け、私まで泣きたくなりました。車を運転して下さる方にも申し訳なくて「本当にすみません」と謝ると、「大丈夫ですよ。うちも子どもが小さい時は大変だったから：よく分かります」と言っただけ、その言葉にどれだけ救われたことか分かりません。
やがて息子は泣き疲れて眠り、私もぐったりして家に帰り着きました。

目が覚めた息子は、「家に帰ってきたあ」と歓声

をあげました。そして、「お母ちゃん、楽しかったなあ」と言うのです。

私は「何が楽しかった？」と聞くと、息子は「えーとなあ、マラカス！」と、うれしそうに答えました。

その晩、子どもたちを寝かせた後、私も布団の中で、この2日間を振り返りました。すると、いろんな人の顔が次々と浮かんできました。困っている時に傘や合羽を貸してくれた人、雨に濡れている息子に帽子をかぶせてくれた人、息子が泣き続けても笑顔で運転してくれた人：。本当にたくさんの方々のお世話になり、そのおかげで息子の「楽しかったなあ」という言葉が聞けたのです。

この2日間だけでなく、毎日毎日、本当にたくさ

んの人のお世話になって、子どもたちが育てられ、

私も母親としてお育て頂いている…。神様がそのことを教えて下さった気がして、ありがたくてありがたくて、涙が止まりませんでした。

翌日、私の両腕はものすごい筋肉痛になりました。

でも、その痛みと共に、私は神様からお礼の心を教えて頂きました。

お世話になって生きている分、少しでも周りの人のお役に立てるよう、私も子どもたちと共に成長させて頂きたいと思えます。

サンキューを忘れずに

玉城真紀子

私は、平成元年に結婚し、その翌年に息子が生まれました。息子は、大きな病気もせずによくすくと成長しましたが、言葉を覚えるのが遅く、私は、不安と不満を募らせていきました。

これではいけないと、保健所の「ことばの親子教室」に参加しました。教室では、大きなボールに体ごと乗ったり、ブランコで遊んだりしました。そして、体の中から言葉を発することが大事だと教えてもらったのです。

それまでは、理解してもらえないことがあると、人に嘯（か）みついたりすることもあった息子でし

たが、教室に通いだして1年が過ぎ、4歳になるころには、安心して幼稚園での団体生活が送れるようになりました。また、弟も生まれ、兄としての落ち着きも感じられるようになってきました。

そんなころ、主人の転勤で、私たち一家はアメリカに行くことになりました。長男は5歳、次男は1歳でした。言葉の覚えが遅い長男のことが心配でしたが、転居先の街に金光教の教会があると聞かされ、少し安心して渡米したのでした。

しばらくは、生活に慣れることに追われていましたが、渡米して1年ほどたったところから、息子の英語が上達しないことが気になり始めました。週に一度通う日本人学校では日本語で話せてうれしそうですが、毎日通うアメリカの小学校では、心なしか、

ぼつんとしているようにも見えます。アメリカ生活が長い子どもさんや、ハーフの子どもさんはもちろん、私たちより後に赴任したご家庭の子どもさんのほうが、しっかりと話しているのです。

悩む私を見て、周りの人たちが「自宅でも英語を話すようにするといいですよ」とか、「まずは母親の英語が上達しないと…」などと助言してくれました。しかし、私は、素直に励ましの言葉として受け止めることが出来ず、その言葉を重荷に感じ、自分を責め、息子を責める日々が続きました。

教会の先生に相談すると「焦らないようにしましょう」とアドバイス下さるのですが、どうしても焦らずにはいられません。私は、だんだんと、周りの人に息子のことを話すのを避けるようになりました

た。

そんなある日、日本人学校の役員をしている女性から電話がかかってきました。運動会についての事務連絡でした。私はその人とは、あいさつ程度のお話しか今までしたことがなかったのですが、なぜかその日は話が弾み、つい息子の言葉のことを話してしまったのです。「しまった！ この人からも、みんなと同じように言われるんだろうな」と考えて落ち込みかけた私は、「大丈夫よ」と言われて、ハツとしました。

「言葉を分かってないと大人は思うけど、今は、しっかり英語を聞くけいこをしているのかも知れないわ。私、言葉の能力はボール投げと一緒に思うの。一度見たボールをすぐに投げられる子もいれば、

100回投げてみて、やっと出来る子もいるの。私たち

一家は、アメリカに来て5年たつけれど、うちの子は、最初学校に登校するのもやっとで、2年過ぎてから、何とか話が出来るようになっていったのよ。

あなたのところは、まだ1年半じゃない。それにね。あなたの息子さんは、健康で、毎日学校に通っているわ。それは、すごいことよ。そりゃ、英語が話せるに越したことはないけれど、転勤でここに住んでいるのも、そう長い期間じゃないんだから、親も子どもも楽しまなくちゃもったいないわ。ただし、サングュー、エクスキューズミー、プリーズを忘れないようにね」

それまで否定的なことばかり言われていた私にとって、この言葉は、何よりうれしいものでした。そ

して、「そういえば、子どもに一番始めに教えた英語は、サンキューだったなあ」と思い出しました。

同じころ、日本に帰国したばかりの友人から手紙が届きました。アメリカにいる時には、すぐく日本に帰りがつていたのですが、手紙の内容は、アメリカでの生活が楽しかった、もつといたかったというものでした。その手紙のことを教会の先生に話すと、「アメリカにいる時には日本の良さを感じ、日本に帰るとアメリカの良さが分かる。それぞれの国の良いところが分かるのは、大切なことですね。出来れば、その国にいる時に、その国の良さを分かっ
て楽しみたいですね」と教えて下さいました。

それを聞いて、「ああ。本当にそうだなあ」と思いました。と同時に、それまでは問題は息子にある

とばかり考えていたけれど、自分自身はどうか？
と思つたのです。出来ていることは見ようとしなくて、出来ていないことばかり見て、感謝も笑顔も忘れて
いる自分ではないか、と気づかされたのです。

それからの私は、長男が、まずは、たくさん友達が出来て、アメリカでの生活が楽しめるようにと、神様をお願いするようになりました。本人にも、あまりうるさいことは言わず、ただ、「サンキュー、エクスキューズミー、プリーズは忘れずにね」と、笑顔で言うように心掛けました。

やがて時が過ぎ、3年の転勤が終わり、日本に帰ることになりました。帰国前の息子は、英語の会話も何となく雰囲気
で理解出来るようになり、「サンキュー」「エクスキューズミー」「プリーズ」の連

発で、会話をしていました。それだけではありませ

ん。折り紙の達人として、クラスの人気者になって
いたのでした。長男は長男なりの方法で対話をして

友達を作り、学校生活を楽しんでいたのでした。

これからも子どもの心と笑顔で向き合い、子ども
と共に成長することを祈っていききたいと思います。

自分の都合、神様の都合

末永正次

私には子どもが2人います。これは、長男が1歳
半になった初夏の頃の話です。

このくらいの年頃になりますと行動範囲も広がっ
てきており、少しでも目を離そうものなら、パー
ッと玄関を飛び出し、気がつけば裸足のまま外で遊
んでいるというようなことが増えてきました。私も
家内も、子どもには伸び伸び育ってほしいと思っ
ていたのですが、この「裸足での外出」、1〜2回な
らともかく何度も続くとなると、そうも言ってい
られなくなってきました。周りの同じ年頃の子どもた
ちは、ほとんど靴を履けるようになっていきますし、

路上には小石やガラスの破片、時にはペットのフンなどが散乱していたりするからです。

そこで、さすがにこのままではいけないなと思い、外に出る時は靴を履かせるよう挑戦するのですが、これがなかなかうまくいきません。靴を履かせようとする途端に泣きわめき、激しく抵抗するのです。

それでも何とかあやしつつ、やっとの思いで半ば強引に靴を履かせるのですが、いつもは元気に走り回り、片時もじっとしてない長男が途端に足の裏に吸盤でも付けたかのように、一步もその場から動こうとしなくなるのです。これが大人の靴やスリッパだと、こちらが何も言わなくてもすんなりと履いて動き回るのでから不思議なものです。だから子ども用の靴も当然、履けないはずはないだろうと思

何度も試みますが、どうにも言うことを聞かないのです。

一体どうしたら靴を履いてくれるようになるのか、思案が続いたある日、その日も同じようになかなか靴を履こうとしない長男を前に、家内が「もう、これからは無理に靴を履かせようとするのはやめましょう」と、方針転換をしたのです。

それを聞いた私は、果たしてこれで本当に良いのだろうかと思いました。しかし、考えてみたら靴を履かせないことによって厳しい目にさらされるのは、どちらかという私以上に母親である家内の方です。それ相応の決意と覚悟がなければ、言えることではありません。そんなことを思った時、私の中に、ふっと今までとは違った思いがわいてきました。

そもそも長男が、本当は履こうと思えば履けるはずの靴を、ここまでして履こうとしないのは、もはや単なる子どものわがままではないかもしれない。もしかしたら、神様が子どもをおして親である私たち夫婦の心を鍛えよう、育てようとされているのではないだろうか。そんな思いに駆られたのです。

そして、私も腹を据えようと思いました。「長男がどうしても靴を履こうとしないなら、それでいい。私も無理に靴を履かせるのはやめよう。そこから先のことは神様にお繰り合わせを願ひ、長男が靴を履かないという現実にはじゅくり付き合ってみよう」と思えたのです。

以来、私も家内同様、長男が裸足で外に出ていても、無理に靴を履かせることはしないようにしま

した。確かに体裁は悪いですし危険も伴いますから、ある程度はきちんと子どもの様子も見えていなくてはなりません。それは生易しいことではありませんが、家内の思いにつられるように、私もそのことに添わせて頂きました。

それから2カ月くらいが経ったある日、定期健康診断のため、家内が長男を近くの保健所まで連れて行く機会がありました。その時も長男は靴を履いておりませんでした。周りの他のお子さんたちは、ほとんどの子が靴を履いていました。そういう状況の中、家内が保健所の方から「やはり、そろそろ靴は履かせた方がいいですよ」と指摘をされたそうです。もとより長男に早く靴を履かせるようにしなければという思いは、家内自身が誰よりも強く感じて

いたはずですから、指摘をされて「そんなことは百も承知です」という思いもあったことだろう、と思います。しかし家内はその指摘を、そういう風に受け取るのではなく、「これは神様からのメッセージだ」と感じ取り、今一度、長男に靴を履かせてみることにしたのです。

とはいえ、ここ2、3カ月の間に長男の足のサイズはだいぶ大きくなっており、もともとある靴では小さくて履けなくなっていましたので、健康診断が終わった後、家内は早速、新たに靴を買いに行くことにしました。しかし靴を履くことをあれほど嫌がっていた長男が、そう簡単に履いてくれることは考えにくいことです。買ったところで今までのように、ほとんど履かずじまいにならないければいいが…、と

いう思いが私の脳裏にはよぎりました。

ところがどうでしょう。いざ、恐る恐る長男の前を買ってきたばかりの真新しい靴を並べましたら、何の抵抗もなくスツと自分から足を差し出してきたのです。右足、そして左足と今までとは別人のようにスムーズに靴を履いたかと思った次の瞬間、今度はそのまま外に出てうれしそうに走り出したのです。私は一瞬、目を疑いました。その鮮やかなまでに自然な流れに恐れ入るような思いでした。

私はこのことをとおして、子どもに靴一つを履かせるのも、必ずしも私たち親の都合や思いで履かせられるものではない、ということを思い知らされました。そしてどうにもならない時には、神様に願いつつ、一度、親としての常識観念、見栄体裁を外し

姑のひと言

久保田久美子

てからでも、子どもに寄り添い、後のことは神様に任せてすがらせて頂くことによって、しかるべき時にしかるべくして神様がご都合をつけて下さるんだなあということを感じました。

ラジオをお聞きの皆さんも、何かに行き詰まったりした時には、「自分の都合」を一度神様に預けてみてはいかがでしょうか。そこから、思いも寄らぬ

「神様のご都合」が現れてくるはずですよ。

教会に嫁いで36年、姑を見送って6年の歳月が流れました。結婚当時から私は、考え方のあまりにもかけ離れた姑に心の中で反発し、葛藤（かつとう）を続けていました。

昭和49年、24歳で結婚した私は、これから始まる新しい生活への期待と不安を抱いておりました。当時、姑は65歳。明治生まれの、聡明で凛（りん）とした、芯（しん）のとても強い、昔気質の気丈な女性でした。

最初の7年間は、夫の勤務先の関係で、岡山と教会のある広島を行ったり来たりの生活でした。姑と

の間で少々嫌なことがあっても、戻る場所があり、気持ち切り替えることが出来ていました。

ところが、両親も年老いて同居生活が始まるようになり、最初のうち、姑は「これでやっと食事を作ることから解放される」と大変喜んでくれました。しかしこの後、厳しい現実が待っていたのです。

数カ月がたつと、主人を通して私への不満が伝わってくるようになりました。「買い物に行く回数が多すぎる」「料理の品数が多くてぜいたく過ぎませんか」などです。

私なりに、日に三度の食事の献立を考え、少しでも安い材料で時間をかけて品数を多くし、ごちそうに見える工夫をしているのにと、私の心は穏やかではありません。これから先が思いやられると、一抹

の不安がよぎりました。

案の定、子育てについても、ぶつかりました。長男が生まれた時のことです。「跡取りが出来た」と、とても可愛がり、薄着をさせると「風邪を引くから、一枚着せなさい」と言い、たくましく育てたいと思う私は「これでいいのです」と言い返しました。

すると姑は「この子が病気になってもいいんですね？」と言ったこともありました。

また、3人の子どもたちは、毎日のようにお風呂に入りたがりです。すると「お風呂を沸かす回数が多いのではないですか」と不機嫌になり、子どもに合わせてご飯を炊くと「今日は針のようなご飯ですね」と、歯が悪いせいもあつてか、きつい口調で訴えかけてきます。

今であれば、さらりと流せるようなことでも、当時はどうしても許せなくて、いつも一方的に自分の考え方を押し付けてくる姑が嫌で、さりげなくその場を立ち去ったこともしばしばでした。

こんな苦しい心の状態を続けていたある日のことでした。姑とお茶を飲んでいたら、突然姑が「久美子さん、長い間、辛抱してくれましたね。結婚式の日、あなたのおかあさんたちを乗せたバスが帰っていくのを、涙を流して見送っていたあなたの寂しそうな顔は、今でも忘れられません」と言ったのです。「ええ〜！」と、思いがけない、予想もしない姑の言葉でした。私はその言葉を聞いて、「まさに、神様が姑に言わせようとした言葉にちがいない」と思いました。「姑は、ずっとこんな思いで今まで私

を見てくれていたのか」と思うと、ありがたい気持ちと同時に、あんなこと言われた、こんなこと言われたと、不満ばかり思っていた自分が恥ずかしく、情けなく思われてきました。一方的に色眼鏡で相手を見ていたのは自分だったんだと気付かされ、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

姑の思いを知ってからは、姑を見る目が変わってきて、不思議なほどわだかまりがなくなり、素直な心で話せるようになりました。

すると、姑のすぐれた面が、次々と見えてくるようになってきました。お米のとき汁は草木に、少し匂いの付いたものでも捨てないで、洗って味を付け直して食べるなど、食べ物を決して粗末にしないこと。男性用のワイシャツの襟を取ってスカートと

つないでワンピースに、袖は腕抜きに、最後はぞう

きんに、というように、古着を十二分に活用し、全てのものを大切にしていました。さらに、食事の前や朝夕、神様への祈りは欠かしたことなく、神様に心を向けた生活が、とてもしっかりしていました。

また、戦時中、国の政策により、教会会堂が強制的に取り壊されたことをとても残念に思い、終戦後、何としても信心のともしびを絶やさないう、数回にわたる増改築に図面を書くなど、一途に、教会の復興建築に情熱を傾けていたようです。正直、私にはかなわないと思いました。

これまでの自分を振り返ると、姑の表面的な言動ばかりにとらわれ、姑の深い思いをくみとることが出来なかったと、改めておわびの心が沸いてきまし

た。

晩年、姑は次第に年老いて、私のことを「久美子さん」から「久美子お母さん」と呼ぶようになり、気が付けば立場がすっかり逆転して、私は姑のお母さんになっていました。洋服を着ることから始まり、何につけても「久美子お母さんが上手」と言って、私を頼ってくれるようになり、何げない姑との会話も楽しく、心から姑をいとおしく思えるようになりました。

あれほど厳しかった姑が日増しに穏やかで神々しくなり、眠るように94歳7カ月の尊い生涯を終えました。生前、姑は「迷った時は何が一番大切か考えなさい」と申しておりました。常に神様が第一の姑の生き方は、時には厳しくて受け入れられないこと

もありましたが、神様の思いにかなっていったように

思うのです。

森 清司

私は姑との間柄を通して、自分の考えが正しく間

違いないという、心のおごりを教えてもらったよう

に思います。今では、姑に心の底からお礼を申さず

にはおれません。私の中で、年追うごとに姑の存在

が懐かしく、大きくなっています。

母の祈り、娘の祈り

春子さんは毎日のように、私の奉仕する金光教の教会に参拝し、娘の美佳さんのことを神様にお願ひしていました。美佳さんは国際結婚をしてスペインに住んでいます。3人の男の子の母親として、仕事と子育てに奮闘し、出来るだけ節約をして旅費を貯め、2年に一度は夏休みの時期に子どもたちを連れて日本へ里帰りしてきます。春子さんも、娘や孫たちに会えるのを何より楽しみにしていました。

ところが、世界的な不況のあおりで、これまで美佳さんの働いていた店が閉じられることになったのです。今まで、勤務時間などで大変優遇されてきた

職場でした。それでこそ、3人の子育てをしながら勤めることも出来てきたのです。これから先、主人の収入だけでは、日本へ里帰りすることも難しくなるでしょう。

娘からそのことを聞いた春子さんは、すっかり落ち込んだ様子で教会に参拝して来られました。私は事情を聞いた後、次のようにお話しをしました。「神様は決して無駄事はなさいません。必ず先々良いことになりますから、落ち込まずに、元気な心で信心しましょう。美佳さんも、きっとショックを受けているはずですから、母として、よく話を聞いてあげて下さいね」。

春子さんは気を取り直し、家に帰ってから早速娘に連絡を取りました。「神様にお願ひしたから、き

っとまたいい仕事が頂けるはず。心配しないで、あなたもすっかり信心しなさい」。

ところが、美佳さんからは意外な返事が返ってきました。「お母さん、今仕事が無くなってしまうのは、経済的には大変なんだけど、神様が、今まで出来なかったことをする時間を下さったように思うの。だから、私のわがママを聞いてもらえない？」と言うのです。

実は、美佳さんには、数年温めてきた願いがありました。長男が小学生のうちに、たとえ短期間でも、日本の学校に留学させて、日本語や日本の文化に触れて欲しいと思っていたのです。しかし、仕事を持つていた美佳さんは、子どもたちを学校に通わせる程長く日本に滞在することが出来ません。それに加

えて、日本の両親に負担をかけるのではないかという心配もあり、これまでずっと、その思いを打ち明けられずにいたのです。

「昨年里帰りしたばかりで蓄えは十分に無いけど、再就職したら、今までのようにまとまった休みを取れなくなるかもしれない。願いをかなえるチャンスは今しかないと思うの」。美佳さんの言葉には、子育てにかけ強い思いが込められていました。

けれども春子さんは、思いがけない成り行きに困惑していました。今年の夏は帰ってこないものと思っていたので、準備が全く出来ていなかったのです。留学するといっても、受け入れてくれる学校があるかどうかも分かりません。春子さんは「やっぱり再就職を優先すべきではないか」と返事をしました。

春子さんが教会に参拝して、興奮気味にそのことを話された時、私は申しました。「それこそ、神様が道をつけて下さっているのではないですか。初めから無理だと決め付けないで、どこまで出来るか取り組んでみてはどうでしょう。就職先を探すのは、それから後でも遅くないと思いますよ」。

落ち着きを取り戻した春子さんは、もう一度娘の願いを聞いてみようと思ひ直し、家に戻りました。するとそこに、美佳さんからメールが届いていました。「さっきは無理なことを突然お願いしてごめんなさい。お母さんがまた病気で倒れてはいけなから、あきらめようと思う」という内容でした。

春子さんは約20年前、くも膜下出血で手術を受けています。自宅の風呂で倒れた時、いち早く異変に

気付いたのは、当時大学生だった美佳さんでした。もう数分発見が遅れたら命はなかっただろう、と言われています。それだけに、美佳さんは母の健康を常に気遣い、春子さんもまた、娘を命の恩人として大事に育ててきたのです。

メールを読んだ春子さんは、これまで自分の都合ばかりで物事を考えていたことに気付きました。

「娘のことを心配して神様に祈っていたつもりだけれど、むしろ娘の信心のほうが一歩進んでいるのではないか。仕事を失うという困難な出来事をも、神様の思し召しとしてしっかり受け止めている。そしてまた、自分の願望を優先せず、親の健康を第一に思い、祈ってくれている」。この時、春子さんの心が決まりました。「そうだ。神様はきっと良いよ

うにして下さる。娘たち家族の成長を願って、出来ることを精いっぱいやってみよう」。春子さんは早速、娘たち親子を迎える準備に取り掛かりました。

来日の日まで1カ月半しかありませんでしたが、毎日娘と連絡を取り合い、小学校に掛け合ったり、部屋の片付けをしたり、忙しい日々が続きました。教会に参拝する春子さんの表情は、日を追って明るさを増していくように見えました。

そして、長男と次男は、かつて美佳さんが通っていた小学校へ、三男も近所の幼稚園に受け入れが決まり、いよいよ、待ち望んだ来日の日がやってきました。初めのうちは慣れない環境に戸惑っていた子どもたちも、友達から日本語を教わる代わりにサッカーを教えるなどして、すぐにクラスの人気者にな

神様との出会い

っていました。1カ月というわずかな期間でしたが、子どもたちにとって、掛け替えのない体験になりました。

仁科 信枝

日本とスペイン。遠く離れて暮らしていると、心配の種は尽きません。けれども、神様は決して無駄事はなさらない。信心していればきっと良いことになっていくという信念が、親子のきずなを一層強いものにしていくのです。

ある日、夕食の用意をしていた私の横で、食事が出来上がるのを待っていた子ども4人の会話から、「神様なんていないから」という19歳になる長男の声が聞こえてきました。会話に加わっていなかった私は、何も口を挟むことなく、その長男の言葉で終わった会話に、寂しさを感じました。

金光教の教会で育ち、いつも神様の話を聞いて育っているはずなのに、どうして「神様なんていない」と言うのが不思議でしたが、「そうか、まだ神様に出会っていないんだなあ」と思いました。

今思えば、私も学生のころには、長男と同じ思い

だったし、神様なんてよく分からないという時期があったように思います。40代になった今も、子どもたちにうまく説明出来ず、自分に問いかけているのが毎日ではあります…。

私は短大時代にアーチェリー部に所属し、勉強ではなく8割方、アーチェリーをするために通学していました。もちろん、短大の2年間ではあまり上達せず、義兄がアーチェリーのコーチでもあったので、短大卒業後も趣味程度に、仕事の合間に楽しんでいました。

短大を卒業した20歳の夏、国体選手の選考を兼ねた県大会に、社会人として出場しました。ありがたいうちに、当時、社会人女性のアーチェリー人口は少なく、数名の参加者の中で一位になると国体選手

になれるという状況でしたが、趣味程度の私には関係のないこと。試合を楽しもうという楽な思いで参加しました。ところが、成績中間発表で、なぜか私が一位。このまま一位を維持すれば国体選手になれるという状況でした。関係のないことと思っていたのに、こうなると負けず嫌いな私は、何としても一位になりたいと思い始めました。そして、たぶん初めて「神様、お願いだから私に勝たせて！」と思いました。

しかし、こういう思いも寄らぬ成り行きで、急に緊張し始め、手も足も震えだすほどです。手足が震え、フォームが崩れると、矢は真つすぐ飛びません。一位どころか、一気に順位は下がります。そこで、私が自然に取った行動は、一本の矢を撃つごとに願

いを込めるということでした。「どうぞこの矢が真つすぐの真ん中に届きますように、落ち着いて撃たせて下さい。どうぞ神様、力を貸して下さい」。

渾身の力で願い、そして今まで教わってきたベストのフォームを心がけ、一本一本丁寧に撃ちました。

すると、どういう力が働いたのか、弦（つる）を引く右手、右腕に、自分の力以上の力が加わったような、何かが私を助けてくれているような、一緒に弦を引いてくれているような感じがありました。とても緊張しながら、独りぼっちでガチガチになりながら競技をしている私は、誰かがそばに一緒にいてくれるような安心感が湧いてきました。

「きつとそばに神様がいる」。直感的にそう思い、その不思議な出会いに驚き、喜び、安心しながら試

合を続けました。結果は一位。しかし、試合に勝った喜びよりも、神様に一生懸命を向ければ、神様に会えるのではないかということを知った喜びの方が大きかったように思います。

その後、25歳で結婚し、翌年、長女を出産しました。妊娠中の健康状態も良く、初産なのに3時間ほどで長女は生まれ、初めて我が子を胸に抱いた時、言葉では言い表すことの出来ない喜びを感じる反面、「どうやってこの子は自分のお腹の中で出来てきたんだろう。私が目や口、手を作ったわけでもないのに」。人間として私のお腹から現れたことが不思議でならず、医学的には説明出来るのでしょうか、私はこの時、素直に神様の力を感じずにはいられませんでした。まさしくこの子は神様の子。神様から

授かり受けた子。私の子、私の物ではないと言う思いが広がりました。

このことは、20年間、4人の子どもを育てさせて頂く上で、私の子育ての土台、基本になっていきます。しかし、自分の思うようにならず、声を荒げて子どもとぶつかり合うことも度々。その都度、我が子であつても神様の子。一人ひとりの個性を大切に、神様の子として接していこうと、長女を出産した時のことを何度も思い返しているところです。

さらに、先日のことです。ある女性が命を救われたという話をお聞きして、私は今日まで大きな病気や事故にあつたこともなく、命を救われた経験など無いなあと思つた瞬間、5歳の時にトラックにひかれそうになつた場面が鮮明に浮かび上がってきました

た。

狭い道を直進してくるトラックに気付かず、私は道路を横切つたのです。間一髪のところまでトラックが止まり、事なきを得ました。そのことははっきり覚えていて、その恐かつた経験から、私は何をすることも用心深い性格になつてしまったのだと思つていたのですが、ただそれだけではなく、40数年経つた今、「あの時、神様に命を助けて頂いたんだ。命を助けて頂いたにもかかわらず、何のお礼もしていないのに、今日まで元気にお育て頂いてきた。何と申し訳のないことだろうか」と、思いはあれこれと広がります。

今更ながら、あの時のお礼、今まで気付かなかつたお詫び、そして今新たに、自分の命を助けて下さ

り、ずっと私の側にいて下さる神様に会えたお礼を日々させて頂いているところです。

私は、このように、神様と出会うことが出来ました。その出会いはそれぞれ違います。神様に対する感じ方も違います。その中で、その時、自分の心がどういう向きであったのか、どうすれば神様に出会えたのかをすっかり思い出し、日々生活しています。

「神様なんていない」と言う長男にも、いつの日か、神様に会える日が来ることを願うばかりです。

薄紙を貼るように

吉川 信吉

私は、昭和39年、6人兄弟の次男として福岡で生まれました。実家は金光教の教会です。

昭和63年に大学を卒業後、私は、東京の機械メーカーに就職し、本社の人事課に配属されました。人事課は、課長以下、私を含めて5人でしたが、皆良人ばかりで、心の中で「私はここで幸せになっていくんだなあ」と、漠然と思っていました。

というのも、それまでの私は、例えば高校の同級生が似顔絵を書く時、「吉川の似顔絵を書こうとすると笑顔しか思い浮かばない」と言われるほど、いつも愛想の良い顔をしていましたが、実は、人に気

を遣う疲れやすい性格で、必ずしも人付き合いが得意というわけではありませんでした。だから、この職場の雰囲気心がホツとしたのです。

ところが入社して1年がたとうとするころ、突如、私は心身症の状態になってしまったのです。特に仕事でストレスを感じたり、イジメにあったわけでもなく、ただ、このまま幸せになれるなあと、ホツとした瞬間、気の緩みが生まれたのか、心にポツカリと穴が空き、その穴の深みにはまったかのようにでした。

寝てもさめても気分がすぐれず、言葉を出そうとすると、嗚咽（おえつ）が出そうになり、心が苦しくて苦しくてたまりません。

毎日毎日そのような状態の中で2週間がたち、よ

うやく会社近くの金光教の教会にお参りすることが出来ました。ここは、東京暮らしが始まってからずっと参拝していた教会で、すっかり元気をなくしている私の話を聞いて下さった先生は、「今度は信吉君やったんか」と話し掛けてくれました。実は、先生も学生の時、私と同じ心身症になったとのことでした。「今では次々に、私と同じような悩みを抱えた人が教会にお参りになっているんだよ」と話して下さいました。そして、一度病院に行つて診察を受けてみてはどうかと勧められましたが、私は病院へ行くことを拒みました。なぜなら、今日でこそ著名な方々が、自らの心身症の体験を告白したりして、取り立てて奇異な目で見られることもなくなりまして、

だが、当時は心身症に対する理解があまりない状況

だったからです。

その後、1カ月たっても状態は一向に回復せず、とうとう心身ともに行き詰まり、疲れ果ててしまいました。そして、何とかこの状態から抜け出して楽になりたいとの思いから、「神様に、命を賭けてご祈念しよう」と、ある日の夕方、埼玉県にあった会社の寮から、スクーターに乗って、東京の奥多摩まで行こうと決めました。死に場所を求めてのことでした。

3月の夜にもかかわらず、不思議と寒さは感じませんでした。しかし、奥多摩が近付き、山が見えてくると、私の歯がガチガチ鳴りだしました。今から考えると、私の歯がガチガチ鳴りだしました。今から考えると、あれは、魂の抵抗のようなもの、「本当

に死んで良いのか？」という心の問い掛けのようなものだったと思います。

私は、ある山にたどり着き、幹線道路の脇を流れる川に架かる橋を渡り、川沿いの砂地を少し上がりました。そして、見付けた小さな広場で祈りました。

「神様、この瞬間に助けて下さい！さもなければ、この場所で死にます！」と、その場所で私は一生懸命祈りました。しかし、その場で心身症から抜け出すことは出来ませんでした。ただ、追い詰められていた心に、ふと、「こんなことしたらいかんな……」

という考えが浮かびました。そして、母はこんなことをする自分を叱るだろうが、受け入れてもくれるんじゃないかなとの思いが沸き、それは、いつしか親の愛に抱かれているような安心感に包まれた時間

(とき)に変わりました。私は、その場にどれだけの時間居たのか覚えていませんが、明くる朝の4時ごろ、会社の寮に戻っていたのでした。翌日には、絶対に行きたくないと思っていた病院に、不思議と行くことが出来るようになりました。

あれから20年がたちました。その間、私は会社を退職し、金光教の教師となり、結婚もして、3人の子どもも授かりました。9年前からは、教会長として教会を後継することにもなりました。以前では、心が高ぶると、3時間ほど本を読んで心を落ち着けないと眠ることが出来ない状態であったのが、今ではすぐに眠ることが出来るようになりました。何より、今こうして家族と一緒に過ごすことが出来る、このこと一つとつてもありがたいことと思

わずにはいられません。

世間では、病氣などがだんだんと良くなることを、薄紙をはぐように良くなると言いますが、金光教の教祖は、薄紙を貼(は)るように良くなると教えています。

私は、心身症がすぐに良くなったわけではありませんでしたが、私の気を遣う弱い心が顔を出し、思い違いなどで迷い苦しんでいたのが、長い年月をかけてだんだんとなくなっていきました。それはまるで、神様が私の心の弱い所、弱い所に薄紙を一枚ずつ貼って下さり、少しずつ、私の心を支え、落ち着き安定させて下さった、そんな実感があ

るのです。
今、私の奉仕する教会にも、心身症で悩む人たち

が参ってきます。そのたびに話を聞かせてもらい、

一緒になって辛くなったり、悲しくなったり…、しかし、その苦しみから抜け出していく方たちをみると、ありがたく嬉しい気持ちになります。一つひとつのことを神様をお願いさせて頂きながら毎日を過ごす中で、私は、それらの方々の悩みを聞き、励ましつつ、神様が薄紙を貼って下さり、だんだんに助けられるそのお手伝いを、これからもさせて頂きたいと思っております。

きっと神様は私のために

井上 直文

私の長男・道夫が幼稚園の時の出来事です。

ある日、担任の先生からの連絡帳に、私たち夫婦の目を疑うような言葉が書かれていました。「今年のお遊戯会で、ぞう組は『がんばれ！ スーパーピーチマン』という劇をします。道夫君には、その大役をしてもらいます。明日から練習を始めるので、お父さんお母さんも応援してあげて下さい」と。

ぞう組というのは、長男のいる年長組のことで、「がんばれ！ スーパーピーチマン」というのは、いわゆる「桃太郎」のお話のことです。親である私たちは、「どちらかと言えば、おとなしく、引っ込み

思案な道夫が大役である主役のスーパーパーチマン、桃太郎だなんて」という驚きと、「そんな道夫が、みんなの前で主役を演じることが出来るほどに成長したんだ」という喜び、そして、「みんなの注目のじゃないか。カッコいいぞー、頑張れよー」という期待に胸躍らせました。

その翌日、長男がお遊戯会で着る衣装を持って帰って来ました。そして、またまた、目を疑うようなことが起こったのです。その衣装を見てみると、白い長袖、長ズボンに茶色い斑点、そして、耳の付いたかぶり物……。どこから見ても、何回見ても、大役であるスーパーパーチマン、桃太郎ではありません。そうです！「大役ではなく、犬役」だったのです。

慌てて連絡帳を見直すと、間違いなく犬役と書かれ

ているではありませんか。私たちの単なる見間違い、早とちりだったのです。

私たちは、「なんだよー、犬役かー。脇役だなー。もうちよつと目立つ役だったら良かったのに……」という、ほんのちよつとの失望と、「そうだよねー、道夫の性格からして、まさか大役なんてねー」という妙な納得、そして、実に身勝手な勘違いをしていたことに反省しきりでした。

それから数日間、毎朝、「道夫。今日も犬さんの練習頑張っておいでよ。お遊戯会の日、楽しみにしてるから」と、言葉では言いつつも、大役と犬役の落差をぬぐい切れません。

長男はというと、毎朝張り切ってお迎えのバスに乗り込み、楽しく精いっぱい犬役の練習をして帰

ってきます。長男にとっては、大役であろうと犬役であろうと、主役であろうと脇役であろうと、そんなことは関係ないのです。大好きな先生から、「道夫くん、犬さんの役、頑張つてねー。犬さんがいないと、スーパーピーチマンも鬼退治が出来ないんだからね」と頼まれ励まされ、与えられた犬役に大喜びで一生懸命に取り組んでいるのです。

そして、お遊戯会当日。長男は、「あつ！鬼ヶ島が見えてきたぞ！」という犬役として一度だけのセリフをパーフェクトにこなし、練習通りに、決して目立ちほしくないステージの端の方で、赤鬼Bとの太刀回りを立派に演じきり、ぞう組の「がんばれ！スーパーピーチマン」は大成功に終わりました。

そして最後、ぞう組のみんながそろってステージ

に立つカーテンコールの時、長男は、保護者席の私たちを見付け、嬉しそうに、どこか誇らしげにニッコリと微笑んでピースサインをしてくれました。親である私たちには、犬役の長男が、主役のように輝いて見えました。

そして、この出来事にはまだ続きがありました。

お遊戯会の数日後。長男の大の仲良しの親御さんから、思い掛けない嬉しいことを言ってもらいました。「道夫くん、本当に楽しそうに犬さんの役頑張っていましたねー。うちの子も、『道夫君と一緒に犬さんをやりたかった』って言ってたんですよ」と。犬の役を楽しそうにやってる長男の姿が、その友達にも何だか良さそうに見えて一緒にやりたくなったのでしよう。

後で考えてみて、先生は、クラスの子どもたち一人ひとりの持っている個性が充分に發揮出来るように、そして、クラスみんなの力で「がんばれ！スー

パーピーチマン」の劇が成功するように、よくよく考えて、長男にとってもクラス全体にとっても一番良い役目として犬役を用意して下さったことでしょうか。長男はその与えられた犬役に何の不足もためらもなく、喜んで一生懸命に取り組んだことでしょうか。

この出来事を通して、私は「神様は、どんな時でも、一人ひとりが幸せになるように、その人その人のために一番良い道を用意してくれている。そして、みんなが共に幸せになることを願っている」という金光教の教えを思い出し、この出来事での先生と長

男の関わり方が、神様と人のあるべきかかわり方に思えてなりませんでした。

私たちの生活の中で、自分の思い通りでない事柄や損と思うような役回りに出合った時、「嫌だなー」とか「つまらないなー」と思うのではなく、「これはきつと、神様が私のために一番良いと用意して下さったことなんだ。そして、周りの役に立つことなんだ」と思いを変えて前向きに取り組むことで、自分にとっても、周りにとっても、良い方へと事が進んでいくのではないのでしょうか。

私も家庭や仕事や地域社会の中で起きてくるすべてのことを、「これはきつと神様が私のために…」と受け止めて、前向きに取り組む稽古をしていきたいと思います。あの時、長男が犬役を喜んで精いつ

ばい練習し、演じた姿のように。そして、それが自然と周りの人にも共感してもらえようになつたら、なお嬉しく、ありがたいことだと思えます。

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp